

## 史 談

2012 (H24) 12. 25

## ■ 置賜民俗学会「置賜の民俗を訪ねる」

置賜民俗学会の定例研修会として、11月4日(日)に会員の方々が白鷹町を巡りました。白鷹町史談会では江口儀雄、守谷英一の2名が会員です。2人で案内役をして、称名寺、深山観音堂、つぶて石、瑞龍院などを巡りました。



遠くは東京からわざわざ参加した方もいて、16人の参加でした。あいにくの雨交じりの天候でしたが、車3台に分乗し、予定した場所を巡ることができました。

## ■ 「疋(ひき)」というお金のこと

丸川二男

先頃の三十三観音巡りでは、いろいろとおもしろいことにぶつかった。その中のひとつが「疋」という単位のお金のことである。

この「疋」という言葉は、この地域では織り上げられた反物を扱う単位として使われてきたので、お金の単位を思い浮かべる人は多くはないだろう。だが、あちこちの文献には「疋」が両や朱、分、文と同様に、貨幣の単位であったことの記述がでてくる。

しかし、肝心なことは実際にこの地域で、いつ

ごろ、どういう形で使用されていたのかということである。おそらくは今まで見ていても気がつかなかったのかもしれないが、今回は偶然とはいえ、高玉の円福寺・養蚕殿内の宝珠の寄付面付で確認することができた。慶応二年のものである。

この「疋」については百疋が一貫文、四貫文で一両という、おおよその目安がある。円福寺の面付の場合は「二百疋」の寄付だが、次に一両、二両という順序で寄付した人の名前が並んでいる。ここでは二貫文、すなわち一両の半分の金額ということになるだろうか。ならば当時の一両という金額は、今にすればどれほどになるのだろうか。

その時々のお金のことは貨幣制度のめまぐるしい変化のせいもあるが、米の相場によってその価値が大きく変動したこともあり、わかりにくいことおびただしい。更に地域差も加わることから、当時のお金の価値を今に置き換えるのは容易ではない。

以前、幕末に大般若経を求めた時の金額を比較して、一両の価値を推測したことがあった。その時は『大般若経』六百巻を約三十両で求めていたという二件の記録をもとに、これを今の価格に直すことを試みた。まずは経本一卷を五千元(今も安価な方ではこの価格である)とすると、六百巻で三百万円という数字がでてくる。つまり、当時の三十両が今の三百万円に相当し、一両が約十万円という値になる。

この数字は、かつて最上川から中学生が拾い上げた貨幣を荒川幸一さんが当時の米相場から考証した時の、一両は米五表に相当したということと、ほぼ一致している。今はかなり下落しているが、このあたりでも数年前までは米一俵が二万円していたのだから、この数字は見当違いでもないだろうと思う。

もとの円福寺の面付に話をもどせば、「二百疋」という寄付の額は一両の半分で、今日の三〜四万円に相当すると考えると、法外な額でもなさそうな気がする。一方、「疋」という貨幣の用例についてはもっとあるはずで、今まで注視して来なかっただけなのだろう。改めて「衣・食・住」を含

めた周辺の事柄にもっと気をつけてみる必要があるのではなからうか。

## ■ 打越のこと (その2) 守谷英一 (26号の続き)

### 4 山を下りる

昭和24年に打越にも電灯がついた。集落の入口に点灯記念碑が建てられているが、それには昭和24(1949)年5月と記されている。白鷹町に電気が引かれたのは大正4(1915)年から6(1917)年のころのようであるから、打越は下の土地に30年も遅れてしまったようである。

そのような土地であるから、近代化が進むにつれて人々は不便さを感じずようになっていった。特に、学校や就職、結婚の問題は深刻な問題であった。そうして、昭和30年代の後半からぼつりぼつりと山を下りる家が出始める。

小林家の場合、義一さんの父親の弥吉さんがいつでも山を下りられるようにと下に土地を求めていた。

昭和37(1962)年に小林義一さんの家は貝生の野崎地区へ住まいを移す。最後の家は昭和40(1965)年に山を下りる。400年近く続いた打越集落の終焉である。

### 5 終わりに 打越への道筋

打越には貝生の堂田(どうでん)から登った。家がとぎれたあたりの左側の土手にアオソが見られる。アオソは「カラムシ」とも呼ばれ、イラクサ目イラクサ科の多年生植物で、このあたりでは繊維を採るために盛んに栽培されていた。

江戸時代には藩の専売作物となり、荒砥八幡神社の東側には藩の青苧蔵があり、一時は領内のすべての青苧を舟で積み出すまで収蔵していたという。

アオソから採れた糸は「小千谷縮」や「越後上布」の原料となるものであり、織りあがったものは夏の着物とされ珍重された。

ここで見られるものは、野生化したものではあるが、かつて栽培されていたことを示しているものである。

山道を少し登ると大きく左カーブするが、そこに山の神の祠がある。

この山の神は十王地区のもので、石祠には「天明二(1782)年」と刻んであるので、230年程前のものとなっている。

さらに10分ほど登ると右側の杉林越しに2つの小さな社が見えてくる。若布沢の水源に祀られた松尾神社である。松尾神社は酒の神であるが、この神社は荒砥上町にあった大貫酒造のもので、酒の仕込みの時にここから水を汲んで使って使ったという。

その他、現在は愛宕山に移されている大里神社がこの道筋にあったというが、何処なのかわからなくなっている。

さらに15分ほど登ると道路の左側に「打越点灯記念」と書かれた石碑が見える。前述したが、打越に電灯が引かれたのは昭和24年のことだった。

ここまで来ると、打越はもうすぐだ。20分ほどで、かつて集落のあった場所の中程の三ッ滝への分岐点へ到着する。登り初めて約1時間ほどである。

## ■ おしらせ

『置賜民俗』第19号が発行されました。「草木塔の心をさぐる」を特集として、7月1日に開催された研修会の内容や寄稿論文を中心として170ページ余りの冊子です。研修会には守谷がパネリストとして参加しています。また、その他に「民俗誌としてのシンボエ」という論文も寄稿しています。

売価は900円です。会員以外の方にも読んでいただこうと、米沢市内の書店でも販売しています。また、会員が数部持っていますので、御希望の方は江口儀雄さんか守谷まで御連絡ください。